

## 2018 年度 学校経営計画及び学校評価

### 1. めざす学校像

私たちの学校は、YMCAの正章に掲げる Spirit(精神)・Mind(知性)・Body(身体)のバランスを保ち、未来に希望を持ちチェンジメーカーとなる(=社会をよりよく変えていく)青年を育むための、自由で解(ひら)かれた学校であることを目指している。そのために「命の尊厳」を教育目標とし、次の4つを教育目的とする。

1. 自分のペースで自分らしく学び、学ぶ楽しさを知ることから自分の中にある可能性を見つける。(学び)
2. 自分の将来に夢と希望を持って歩む進路を見つけ、目標に向かって進む力を身につける。(進路)
3. グローバルな視点に立って物事を考え、世界の平和を創り出す人材を育てる。(グローバル)
4. イエス・キリストの愛と希望の生き方に学び、一人ひとりの尊厳を認め、互いの存在を大切に、信頼しあえる人間を育む。(自尊心)

### 2. 中期的目標(2018~2021年度)

1. 新学習指導要領に沿って、授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う。

(1) 通学型コースを完成させ、更なる内容の充実を図る。

- ・多様化している高校生に対して、合理的な配慮を行いながら学校への定着を図り、卒業へと導く。そのために設置した「Yチャレンジコース」「マイスペースコース」「グローバルコース」「アドバンストコース」「ウエルネスコース」のカリキュラムを充実させる。
- ・上記5つのコース中心に、一人ひとりにあった学び直しを積極的に実施し、学力の定着を図る。

(2) 教科力を向上する。

- ・教科担当を中心に、各教科におけるカリキュラム研究・授業研究を行い、スクーリング内容の充実を図る。また、レポートの改訂に取り組む。
- ・生徒が自発的かつ積極的に学習に向かうために、より興味・関心を持てるスクーリングとするための基盤を確立する。
- ・探究型授業に活かすため、ICTの活用を図る。

2. 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに添った生徒支援を実現する。

(1) 生徒支援部会を中心に、校内の生徒支援体制を構築する。

- ・生徒情報の共有を密にし、担任が抱え込まず、学校全体で支援していく体制とする。
- ・講師にも必要な生徒情報を共有し、一人ひとりに寄り添いながらスクーリングを進められるように働きかける。
- ・研修の実施や生徒支援アドバイザーの助言によって担任の生徒支援力を向上する。

(2) 専門家や外部との連携を積極的に行う。

- ・特別支援教育コーディネーターを中心にカウンセラーとの連携を密にする。
- ・キリスト教同盟カウンセリング研究会をはじめとする外部との連携を行う。

3. 確実な進路保障の仕組みを作る。

(1) 学び直しができる仕組みを整え、進路に向き合う力を育成する。

- ・一人ひとりが学び直しに取り組むことができ、自ら進んで勉強をするような仕掛けづくりを行う。
- ・生徒のニーズにあったコースとなるよう各コースの内容をより充実させる。

(2) 生徒一人ひとりにあった進路支援の充実

- ・生徒一人ひとりの長所を生かした進路実現ができるように、適切な時期に保護者・生徒と面談を実施する。
- ・できるだけ早期に進路への意識付けができるように進路のカリキュラムを構築する。

(3) 自己実現可能な学習支援

- ・進学コースを中心に大学受験に対応できる学習支援の仕組みを構築する。

4. 開かれた学校づくりをし、生徒が活躍できる場を増やす

(1) YMCAの特徴を活かした海外交流プログラムの充実

- ・YMCAのネットワークを通して海外の学生と交流する機会を提供し、グローバルな視点に立って物事を考える機会を持つ。

(2) ボランティアや世代間交流の機会を提供する。

- ・YMCA内部での連携を通して、学校通信で学校行事やボランティア案内の掲載を増やし、生徒が積極的に取り組めるように支援する。

(3) 他校、他機関と連携し価値観教育を広める。

- ・キリスト教同盟校をはじめとする他校や、医療・教育・福祉機関と積極的に連携を取る。

5. 持続可能な学校とするための体制を確立させる

(1) 社会の大きな変革の中で新しい学校の形を探求し、社会に貢献できる学校を目指す。

- ・専門学校高等課程と共にインクルーシブ教育実践校として打ち出し、YMCAだからこそ育める生徒を支援する。
- ・日本語のサポートが必要な生徒へのカリキュラムを構築する。

(2) 組織改善の取り組みと将来を担う人材の確保をする。

- ・支えあう組織作りへと教員の意識改革を行う。
- ・学力向上につなげることができる教員の確保、養成を行う。

【教職員自己評価の結果と分析・学校評価委員会からの意見】

教職員自己評価の結果と分析〔2019年4月実施分〕	学校評価委員会からの意見
<p>1. 授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う。</p> <p>通学型コースの設置に代表されるように、多様化する生徒に必要な学びの機会を提供することはできているが、学習指導要領改訂に向けて、教科力の向上には課題を残す現状である。問3「各科目の学習計画が生徒の学力に応じて適切に作成されている」では肯定的評価が2016年度40.0%→2017年度61.5%→2018年度46.2%と再び減少する結果となった。どの科目でも学力差の開きが大きい現状が見られる中、生徒の学力に沿ったレポートや学習計画の作成で状況を改善できる兆しがあったのだが、再び対策を練り直す必要がでてきている。</p> <p>また、問34「教員間で授業内容を評価、意見交換などを行う機会がある」での肯定的評価が2017年度30.8%→2018年度46.2%、問35「効果的な校内研修計画を立案し、教職員に実施している」については2017・2018年度ともに46.2%と依然として低いままである。教育効果のある授業の実現に向けての具体的取り組みが急務となっている。</p> <p>2. 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに添った生徒支援を実現する。</p> <p>2017年度から定期的に常にスクールミッション（学校の使命と教育方針）に立ち返り教育活動をしていく姿勢を伝えてきた。問1「スクールミッションがよく浸透している」の項目は昨年度肯定的評価が前年に比べ5.1%減少した（2016年度90.0%→2017年度84.6%）。スクールミッションを意識する機会の少ない教職員がいることの表れであると考え、教職員研修を実施するなど、スクールミッションのより一層の浸透に取り組んだ。その効果により2018年度は92.3%と増加したことに加え、「よくあてはまる」との評価も過去最高の30.8%となった。</p> <p>ミッションの遂行にとって一番重要である生徒支援に関する項目では、問27「生徒指導は学校の方針に従っている」の肯定的評価が2017年度84.6%→2018年度100%と大幅な伸びであった。また問28「生徒の生活指導に組織的に対応する体制がある」も100%の肯定的評価であり、2017年度策定した生徒との「3つの約束」が浸透してきたことや、本校の支援体制が教職員全体のミッション理解のもと、機能していることが示されている。</p> <p>保護者との連携も引き続き実現できているという認識を持つことができている。問29「生徒指導において、保護者との連携ができている」は昨年度同様肯定的評価が84.6%であった。また、問31「カウンセリングマインドを取り入れた支援体制がある」は2017年度84.6%→2018年度92.3%と生徒・保護者への支援体制が実現できていることを示している。</p> <p>3. 確実な進路保障の仕組みを作る。</p> <p>進路支援に関しては、問33「生徒一人ひとりの興味・関心・適性に応じた進路選択ができるような支援体制がある」の肯定的評価が2016年度66.7%→2017年度76.9%→2018年度84.6%と上昇傾向にあることから生徒一人ひとりにあった進路支援が実現できているのではないかと。</p> <p>ただ学習支援に関しては、問32「学習指導において、生徒の実態に合わせた指導方法の工夫・改善を行っている」の肯定的評価が2016年度75.0%→2017年度92.3%→2018年度69.3%と再び落ち込む結果となった。上述の問3でも同様の傾向となっているため、進路支援の中でも特に生徒の幅広い学力層に柔軟に対応できるような学習支援に力を入れることが必要である。</p> <p>4. 開かれた学校づくりをし、生徒が活躍できる場を増やす</p> <p>問24「イベントなど学校行事は活発に行われている。校外のイベントへの参加も活発である」の肯定的評価が2017年度53.9%→2018年度92.3%、問26「他国の歴史・文化の理解、異文化交流など国際理解に対する教育活動を取り入れている」については2017年度84.6%→2018年度92.4%と、生徒に学校行事や課外活動など多岐にわたる機会を提供できているが、本校の強みであるYMCAネットワークを活用したボランティア活動の機会を充実することに関しては、問23「ボランティア活動は活発に行われている」の肯定的評価が、2017年度61.5%→2018年度</p>	<p>【第1回 5月20日(月)】主に生徒・保護者アンケートについて</p> <p>○スクールモットーの項目に関しては、今回も高い評価であった。教職員が意識してスクールミッションを伝えることで生徒・保護者にも十分浸透していることが読み取れる。一人ひとりの自己肯定感の向上を目指していることの意義は大きい。</p> <p>○各コースについては順調に登録者も増えている。今後もより一層のカリキュラムの充実に努めてほしい。特に起立性調節障害を持つ生徒が多く在籍するマイスペースコースの需要が増えている。学校の方向性の1つとしてマイスペースコースの拡充と整備をするべきである。</p> <p>○学びなおしに関しては、在籍している生徒の学力差が幅広いことを考えると、しっかりとサポートできていると感じる。アンケートに生徒が学力向上を実感しているかどうかの項目を設けてはどうか。学力が高い生徒層への進路支援としてスタディサプリを今年から導入したことへの評価も必要である。</p> <p>○レポートに関しての項目は軒並み評価が上がった。教員のレポート向上に対する意識が高まったことが影響していると感じる。レポートに関しては新学習指導要領を見据えたカリキュラムの充実にかかせないことなので、引き続き内容の向上と生徒の実情にあったレポートの作成を期待したい。</p> <p>○生徒アンケートで否定的評価が他の項目よりも高いものが見受けられる。原因を探ることが必要である。特に問8.9.10のボランティア活動や特別活動に関する項目は評価が低い、YMCAとしては得意分野であるはずなので、生徒が参加できる機会を増やしてほしい。</p> <p>【第2回 6月17日(月)】主に生徒・保護者アンケートについて</p> <p>○生徒支援に関する項目は、生徒・保護者とも変わらず高評価である。YMCA学院高校の大きなアピールポイントなので、今の体制を維持することが重要である。保護者のアンケートにもカウンセリングに関する項目を加えたい。</p> <p>○学校からの情報伝達、情報共有の項目は保護者は評価が高いが、生徒は比較的否定的な評価が多い。今年度から導入したメール配信機能の効果を検証したい。</p> <p>【第3回 7月22日(月)】主に教職員自己評価について</p> <p>○自己評価で昨年度と比べて13項目で数値が上昇していることはもっと評価されるべきことである。</p> <p>○評価全体としては、高い結果である。今までの取り組みに自信を持つべきではないか。新しい取り組みももちろん実践していかないといけないが、現在評価されていることをより丁寧にしていくことも大切である。</p> <p>○教職員が日々学校内で話題にしていることが高く評価されている。意識をすることが行動につながって、よい効果を生み出している。</p> <p>○例えば問3「各科目の学習計画が生徒の学力に応じて適切に作成されている」が昨年度よりも評価が低くなっているが、これは教員間でこのことについての意識が高くなっている証拠ではないか。このことが課題だと感じているからこそ、「まだ取り組みが足りていない→評価が低い」のではないだろうか。肯定的に捉える視点も必要である。</p> <p>○財務関係の項目（問7,8,9）は決算時の際などのスタッフへの共有が不足しているだけなのではないか。年に一度でも説明をいれてはどうか。</p> <p>○問37に関して、個々の教員が校外研修に参加はしているが、参加後にあまり共有ができていないことが低評価につながっているのではないかと。共有する習慣をつけることを意識し、全体の利益になるようにしたい。</p> <p>【第4回 9月9日(月)】取り組むべき課題について</p> <p>○進路支援に関しては以前よりも充実しているのは事実だが、教職員の自己評価が高い一方で、生徒アンケートでは進路支援が行き届いていないことが見受けられる。進路意識を高める取り組みの必要性を感じる。</p> <p>○持続可能な学校とするため、良い人材を確保、育成し、長く働いてもら</p>

<p>53.9%とさらに減少する結果となった。生徒自身が社会で必要とされているという実感を持ち、自己肯定感の向上や自己実現に向けても大きなきっかけとなることから、YMCA 内部の連携によるボランティア活動をより周知、推進し、生徒が参加しやすい状況を作ることが急務である。</p>	<p>えるようにしていくことが必要であり、その環境を整えていかないとけない。 YMCA 学院高校が求める教員像を明確にし、募集をしていく必要がある。また教員育成に関しては非常勤講師の協力も得てチームを作っていく必要があるのではないかと。</p>
---	--

3. 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取り組み計画	評価指標	自己評価 (%はそれぞれ在校生/卒業生の順)
<p>「授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う」</p>	<p>(ア) 一人ひとりが自分のレベルにあった学び直しができ、学力の定着ができるようにする。</p>	<p>(ア) 通学型コースを中心に、学び直しの講座とYラーニングによって学びなおしを推進する。</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問 12「スクーリングではわかりやすい学習指導をしていた」・33「学びなおしの講座や学びなおしの取り組みがあり活用することができた」、及び保護者アンケート問 15「基礎的な学力を身につけさせる指導がなされていた」・16「学校の学習サポートは充実していた」</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問 12 の肯定的評価は 2017 年度 82.4 / 91.5%→2018 年度 79.7 / 82.4%、問 33 は 54.1 / 58.8%→49.2 / 49.5%であった。保護者アンケートの問 15 は 71.8 / 81.8%→83.2 / 81.1%、問 16 は 72.6 / 89.6%→81.8 / 86.3%であった。(△) ⇒悪くはない評価ではあるが、前年度より下がった項目もあることから、学びなおしの方法や内容に改善の余地がある。特に生徒アンケート問 33 は学びなおしの講座やYラーニングを活用していたかについての項目だが、肯定的評価は 50%を割り込むほど下がった。生徒全体に学びなおしの取り組みがなされていない現状を表している。</p>
	<p>(イ) レポート内容を生徒一人ひとりの学習レベルにあったものとする。</p>	<p>(イ) レポートが生徒の学力育成に有益なものとなるよう改訂に取り組む。</p>	<p>(イ) 生徒アンケート問 18「レポートの難しさは適切だった」・19「レポートの分量は適切だった」・20「レポートは分かりやすく工夫されていた」</p>	<p>(イ) 問 18 の肯定的評価は 2017 年度 82.0 / 87.8%→2018 年度 86.9 / 87.3%、問 19 は 83.3 / 91.5% →83.3 / 90.3%、問 20 は 75.8 / 82.7%→76.7 / 78.3 であった。(○) ⇒昨年度の具体的計画である教科ごとのばらつきに関しては、評価が下がっていないことから一定のレベルには達しているのではないかと考える。一方、上記項目の中で問 20「レポートは分かりやすく工夫されていた」が他より肯定的評価が少ない。改善に向けて不十分であると思われる。次年度以降特に生徒にとってわかりやすい内容であるものとなるよう取り組んでいきたい。</p>
	<p>(ウ) スクーリングがより多くの生徒にとって興味関心の持てるものとする。</p>	<p>(ウ) 本校の特色である総合選択科目や自由選択科目において、ペアワークやグループワークを通して生徒が主体的に関わる講座をより充実させる。</p>	<p>(ウ) 生徒アンケート問 15「特色ある科目について満足していた」・問 17「必要回数以上のスクーリングに出席していた」</p>	<p>(ウ) 問 15 の肯定的評価は 2017 年度 80.1 / 86.4%→2018 年度 78.7 / 92.4%、問 17 は 71.6 / 83.6%→77.0 / 79.6% (△) ⇒数値が微減した項目もあるが、全体的に本校の特色を活かした科目は評価されているといえる。特に問 15 の卒業生の肯定的評価が他と比べて高いのは、途中転編入生が前籍校の授業との違いを実感しているからだとも推測できる。  ※スクーリングやレポートの充実にむけてなお取り組む余地がある。学びなおしに関しては本校の大きなアピールポイントなので改めて方法を見直し、よりよいものとする。</p>

<p>☞ 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに添った生徒支援を実現する</p>	<p>(ア) 校内の生徒支援体制の枠組みを整える。</p> <p>(イ) 生徒保護者にとってより相談しやすい環境とし、安心できる学校とする。</p> <p>(ウ) 生徒へのサポートの充実、外部との連携のために特別支援教育コーディネーターを配置する。</p>	<p>(ア) 生徒支援部会を中心に、生徒の情報共有を教職員間で行い、学校全体で支援していく体制とする。</p> <p>(イ) 担任に加え、生徒支援などパイザーやカウンセラーなどの専門家の支援体制を確立する。</p> <p>(ウ) 特別支援教育コーディネーターを中心に合理的配慮を行い、より生徒にあった支援ができるようにする。</p>	<p>(ア) (イ) 生徒アンケート問 26 「いつでも相談できる環境が整っていた」・27「保健室・カウンセリングルーム」、及び保護者アンケート問 23「学校は生徒の悩みや相談について適切に対応していた」</p> <p>(ウ) 生徒アンケート問 28「学校の対応は自分の状況に配慮したものであった」</p>	<p>(ア) (イ) 生徒アンケート問 26 の肯定的評価は 2017 年度 82.9 / 90.2%→2018 年度 82.2 / 86.2%、問 27 は 76.2 / 82.9%→75.0 / 74.2%であった。保護者アンケート問 23 は 81.2 / 92.2%→90.1 / 92.7% (△)</p> <p>⇒生徒アンケートはいずれの項目もやや微減であった。保護者アンケートでは在籍生保護者の評価が大きく上がったことが目立った。これは通学型のコースの受講者が増えたことが影響していると思われる。</p> <p>(ウ) 昨年度から項目に加えた問 28 の肯定的評価は 88.9 / 90.3%と非常に高いものであった。</p> <p>⇒本校の大きな特色の一つであるので、特別支援コーディネーターだけでなく、学校全体が合理的配慮に取り組めるような働きかけが必要である。</p> <p><u>※生徒支援の充実は安心できる学校生活に直結するものであり、本校の目指す学校像の実現にとって最重要項目である。年々体制は整いつつあるが、学校全体の意識をより高めることが必要である。</u></p>
<p>☞ 確実な進路保障の仕組みを作る。</p>	<p>(ア) 保護者・生徒との面談を実施することで適切な進路支援を行う。</p> <p>(イ) 進路支援のカリキュラムをより充実させる。</p>	<p>(ア) できるだけ多くの生徒に 3 年生の前期に面談を実施し、進路についての道筋をつける。</p> <p>(イ) 生徒の進路意識と保護者の理解を高めるため、進路ガイダンスの実施時期の見直しを行う。</p>	<p>(ア) (イ) 生徒アンケート問 34 「学校は進路について適切な相談や情報提供ができていた」・35 「自分にあった進路を見つけることができた」、及び保護者アンケート問 21 「学校は生徒の進路について、適切に情報提供し、相談にのっていた」</p>	<p>(ア) (イ) 生徒アンケートの肯定的評価は問 34 が 2017 年度 82.0 / 84.1%→2018 年度 78.8 / 88.0%、昨年度新たに加えた問 35 が 52.7 / 91.4%であった。保護者アンケートは 2017 年度 82.0 / 90.9%→2018 年度 88.6 / 90.5%であった。(○)</p> <p>⇒高い水準を維持できている。問 35 の在校生の評価は、まだこれから進路を決める段階の生徒が多いため、低くなっているが、卒業生の 91.4%が自分にあった進路を見つけることができたと感じている。</p> <p><u>※本校での進路支援に満足している保護者・生徒が多い現状だが、進路を考え出す時期が遅い生徒が多いため、意識を早く持つてもらうためにも進路カリキュラムの見直しと構築が必要である。</u></p>
<p>☞ 開かれた学校づくりをし、生徒が活躍できる場を増やす</p>	<p>(ア) YMC A のネットワークを活かしたグローバル教育の実施。</p> <p>(イ) ボランティアや世代間交流プログラムの実施。</p>	<p>(ア) グローバルコースでは「私のアイデンティティ」や「国際平和セミナー」などの自由選択科目を通してグローバルな視点を学ぶようにする。</p> <p>(イ) YMC A の放課後デイサービスへのボランティアやチャリティーラン・ファミリーカーニバルといった YMC A 行事への参加。</p>	<p>(ア) 生徒アンケート問 9 「特別活動やその他のプログラムなどを通して地域や海外の人と交流する機会は充実していた。</p> <p>(イ) 生徒アンケート問 10 「子どもたちや地域の人たちとも一緒に参加する活動があり満足である。</p>	<p>(ア) 生徒アンケートの肯定的評価は問 9 が 2017 年度 59.5 / 68.3%→2018 年度 66.7 / 71.2%であった。(○)</p> <p>⇒グローバルコースでの取り組みと、香港台湾グローバルシチズンキャンプの開催、韓国語サークルなどで着実に海外交流を経験する生徒、興味のある生徒は増えている。</p> <p>(イ) 生徒アンケートの肯定的評価は問 10 が 2017 年度 58.0 / 75.6%→2018 年度 73.7 / 68.9%であった。(○)</p> <p>⇒在校生の評価の伸びが大きい。通学型コースを中心に様々な体験型学習や行事を行っていることが影響していると思われる。同じ項目の自己評価も 53.9%→92.3%と大幅な伸びで教職員も行事に力を入れていることがわかる。</p>

<p>④ 持続可能な学校とするための体制を確立させる</p>	<p>(ア)日本語のサポートが必要な生徒対象のコース設置準備を行う。</p> <p>(イ) 組織改善の取り組みと将来を担う人材の確保をする。</p>	<p>(ア)2019 年度後期から開始するためにカリキュラムを構築する。</p> <p>(イ) 学力向上につなげることができる教員の確保を行う。</p>	<p>(ア)2019 年度後期は英語、家庭科の各科目を先行させて日本語サポートを実施する方向でカリキュラムを構築している。</p>
--------------------------------	--	--	---